

くろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十二年十月一日発行（毎月一回一日発行）
第十七卷第六号（通巻第一九八号）

鈴



くろっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第198号

10. 2010

磯菊

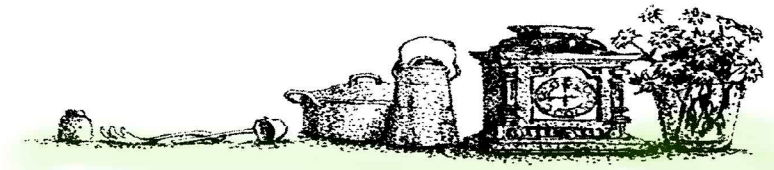
品川鈴子

磯菊の香まで根こそぎ所望せり

除幕せし布ふはと享く秋裕

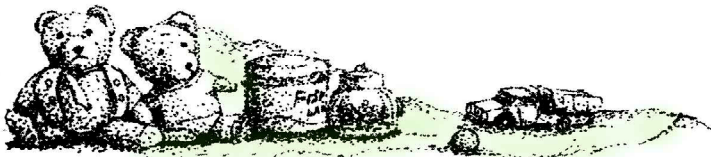
柿啗へ離陸よろめく老鴉

潦落葉が帆掛け舟となる



行幸の輿据ゑし辺に明^{*}治草
巳の塚は朴落葉より堆く
住み棄てし家主に柘榴口噤む
住み棄てし庵むささび主めく
琵琶塚も鳴るか句碑より摩耶風
師の碑から先づは我が家へ摩耶風

※鉄道草・ひめむかしよもぎ



玉

鈴

吟

大阪 島 純子

蓮池の彼方にしづく水上スキー
蓮池のつぼみ色づき数え見る
五月闇救急車待ちて門に立つ
赤肌の昭和新山草点
梅雨晴に昭和新山蒸気あぐ

香川 島内 美佳

竹藪を仄かに照らす宵螢
今朝の雨たつぷり吸ひて七変化
敗れてても感動残し夏の月
梅雨寒し病棟覆ふ閉塞感
工場の煙突三本梅雨晴間

大阪 島本 知子

夕涼しずんずん歩く御堂筋
この男も恋人未滿揚羽蝶
梅雨に入る新発売のアロマ買い
上司にも悩み色々黒ビール
冷房につられて入る百貨店

愛媛 鈴木てるみ

大手術墓を洗いて入院す
大文字火の終わりに音もなし
白菊の中の棺に父眠る
黴の靴穿きてようやく退院す
女子高生夏休みにす初マニキュア

大阪 鈴木 浩子

干梅の箕を紅に染め尼の留守
梅雨ごもり着古し裂きて布草履
陶狸実梅に打たれじつと耐ふ
色街の出格子とどめ七変化
廓街臭ふ海星の筵干

岡山 瀬口ゆみ子

さくらんぼ掴まり立ちに手を伸ばす
螢火を湯の香残りし手に灯す
富貴草宿の御内儀の気働き
向き合ひて浦島草の密談か
風鈴が改札口に揺れる駅

兵庫 高橋 大三

明石城武蔵の池の牛蛙
都市近郊次の田植糸も週末か
大波を打つ雨青田加古川べり
荒梅雨に傘の骨折れハイキング
龍之介のも爪ほどなりや青蛙

大阪 竹下 昭子

蛭袋葉草園の道しるべ
どくだみに葉草園で再会す
五月雨るる千年杉に耳あてて
少子化で史料となりし鯉幟
はじめての蟬にちよっかい放ち犬

大阪 武田ともこ

漱石の旧居に座像香篝散
孫文の書が誇る梅雨の肥後もつこす
夏霧の合間にくつきり阿蘇の嶺
茅屋の空広くなり梅雨明けて
汗ばみし少年の匂ひバスに充つ

愛媛 武智 恭子

アマリリス紅の中にも白少し
水流れ畑一列に葱坊主
咲き初む梔子の花匂い嗅ぐ
青草の中に擬宝珠揺れ動く
梅雨晴れ間小鳥の声の弾みをり

大阪 谷 泰子

暴れ梅雨絵ハガキ表裏はがれ着く
ビル風に飛ばされさうな黒日傘
口大き子燕がまづ餌を貰ふ
へりコプター頻りに飛んで梅雨寒し
亀の子は何を見付けて首伸ばす

大阪 角谷美恵子

梅雨明けの影長々と黒を増す
炎昼に物忘れ病伝染す
「親孝行させて」と封書籠枕
泥まじる塔の礎石に小判草
沸く鍋ででんぐり返り冷そうめん

兵庫 恒成久美子

和上忌の読経千人蓮の花
大堰川堰きとめられて貸ポート
紫陽花にサリ―触れゆくホテル坂
寮住みの孫来て大き西瓜切る
社会人となり自腹の川床料理

愛媛 年森 恭子

風鈴に返事もらひしひとりごと
焼酎も一瓶空けり教育論
鱈の態とどめて鮎の化粧塩
二人酒にて川床の奥の席
形代に載せて心の毒の気も

薬草歳時記

(一九七) ヘクソカズラ (屈糞葛)

牛尾曜子

名をへくそかつらとぞいふ花盛り

高浜 虚子

三年前、突如庭に思いもかけぬ小さくて、可憐な花が鈴なりに咲いているのを見つけ、うれしくなって調べてみると、何とそれは「ヘクソカズラ」。初めは何の意味ともわからず、本にのっていることに感激しました。花が終わると茶色の実がこれまた沢山ついて、花とは打って変わってたくましく、野性的なムードとなります。この花が万葉の頃から有名な悪臭の主とは信じ難く、あれこれ本を開いてみると、

莠菜に 延はひおほどれる屎うん葛くわ絶ゆることなく宮任せむ

高宮王 万葉集(三八五五)

という歌がどの本にものっていて、嫌われ者の代表のように扱われているのには憤慨しました。唯し、花のイメージとは違い、つるのからまり方も、他の者を寄せつけない生命力を感じます。

白と薄ピンクの清楚な小さい花は「早乙女花」という別名もついているが、悪臭を身につけているのは自衛策と考えられている。「アリ」に蜜を盗まれないように、花の中に細かい毛を密生させ、茎や葉を蝕む虫たちを追い払うには悪臭を放つ成分を蓄えることです。虫の被害を受けて、茎や葉が傷

つくと、細胞内に蓄積した「ペドロシド」という成分が分解してメルカプタンというガスになり、このガスの悪臭で敵を遠ざける、という護身術なのです。ところが「ヘクソカズラヒゲナガアブラムシ」というアブラムシはこの悪臭成分を好んで自分の体内にため込み、外敵から身を守っているのです。アブラムシの天敵であるテントウムシも、このアブラムシだけは食べようとしない。とても目立つキザなピンク色をして「私はまずいアブラムシです。食べられるものなら食べてみなさい」とまづさを誇示しているのです。

薬用部は果実です。黄褐色に完熟した果実のさらつとした果汁は「ひび」に良い。冬に熟し指で押すとつぶれるので、日本薬局方アルコール250cc中に果実をつぶして浸し、約一週間冷暗所保存、ときどき良く振り、次にこの液を漉す。グリセリン200cc程加え、浄水を加えて全体で1リットルとした液は化粧水として使える。

アカネ科の蔓植物で、名前は何ともお気の毒ですが、「ヤイトバナ」とか、出雲国風土記に山野の草木「女青」と記されている、「ヘクソカズラも花盛り」という諺もあり、一時でも大いに花盛りを謳歌して美しく咲き誇っています。

参考文献 「薬草図鑑」伊沢凡人・会田民雄(家の光協会)

「雑草ノオト」柳宗民(毎日新聞社)

「いにしえの草木」井上俊(羽衣出版)

「身近な雑草」稲垣栄洋(草思社)

「いけばな植物事典」瀬川弥太郎(小原流出版事業部)

著者略歴 神戸薬科大学卒

ヘクソカズラ (ヤイトバナ、サオトメバナ) [ヘクソカズラ属] (あかね科)

Paederia scandens (Lour.) Merrill var. *mairei* (Lév.) Hara (= *P. chinensis* Hance)
 (屁糞蔓) (中) 鶏屎藤



刈込みや三日見ぬ間の灸花	かわいさについ刈りそびれ灸花	厠より厨をのぞむ灸花	哀れ名の屍糞葛の破れかぶれ	逆コースとれば新たに灸花	婆しやがみ袋まさぐる灸花	表札にへくそかづらの来て咲ける	雨の後むしてきたりし灸花	蛇籠より蛇籠へ渡り灸花	馬医住める家の後ろや灸花
* 三輪 慶子	* 田中 佳子	* 佐田 昭子	* 北畠 明子	* 金子 清孝	品川 鈴子	飴山 實	清崎 敏郎	高野 素十	友雪

(* ぐろっけ)

鈴の奏

品川鈴子選

ラベンダー畑で授乳富士の裾 兵庫 堤 節子

離乳食メロンは大きき口開けて
夜具濡らす児には分からし梅雨晴間

緑蔭に外野の多き将棋盤
立て付けの悪しき部屋にも霞戸入れ 香川 羽生きよみ

勝手ロドアーノブ灼けて午後三時
向日葵も姥も生気を得る夕べ

梅雨冷の病む手を両の手で包む
橋梁の車輛を映す川涼し 兵庫 有本 勝

畑から今も骨出づ沖縄忌
かき氷崩せば海の蒼さかな

冷奴くづし気ままな一人酒
パラソルや社交辞令も言へる歳 兵庫 横内かよこ

流麗な同時通訳汗しらず
桜桃忌傷も癒しも言葉より

計画は完璧までに夏休み
伎藝天御背の影のあたたかや 大阪 井上あき子

女偏の漢字を探す梅雨ごもり
永き日の大津絵の鬼も大欠伸
ウミンチュの兒らの素潜り旅日記

夏の暁居住いよろし猫の野良 東京 西田 敏之
夏瘦の総身こたはり禅問答

佇める携帯電話合歡の花
荒梅雨の投票所や駆け込み寺
潮吹くを指で確め浅蜷買う 大阪 大西ユリ子

龍馬像轟々迫まる青葉潮
川蜻蛉波打つ尻尾魅せられる

新調の潮見燈籠夏祭
ごくごくと喉を潤す灸花 兵庫 金子清孝

釣りたての鮎を凧にして戻す
振花の振れ具合を言ひ合へり

梅雨明けて白衣のまま道を掃く
車庫出しの邪魔しておりぬ凌霄花
ぎつしりと身動きならぬ赤とまと 大阪 磯田せい子

ドロップ缶たてよこに振る濃紫陽花

夏館少女のような霊媒師

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 市川 十二代 〃

* 選句は全て 品川鈴子

離乳食メロンは大きき口開けて 堤 節子

赤ちゃんの能力は意外と優れたもので、五感の発達など胎児の頃から進んでいるらしい。だから乳離れを試みる程に育った児は、食べ物の好き嫌いもはつきりとわかり、それを態度で伝えるには、口を嚙むか大きく開けるのが知恵。

立て付けの悪しき部屋にも葭戸入れ 羽生きよみ

木造の和風家は古くなると、木材の撓みや地盤の変動などで、あちこちと建具に開閉の具合が悪くなる。でも軋む戸や襖を夏季には外して、葭簀を張った戸、夏襖に入れ替えると、住み慣れた家にも新しい風が溢れて、見るからに涼しくなる。

かき氷崩せば海の蒼さかな 有本 勝

猛暑続きの折は掻き氷を食べるのが、ひとときの手っ取

り早い涼感。高く盛り上げブルーのシロップがたつぷり掛けられてうれしい。それを零さぬように匙で食べ崩してゆくと、まるでハワイの海のような碧さが透き通る。この爽やかな色彩に、体の芯まで涼くなる。

桜桃忌傷も癒しも言葉より 横内かよこ

桜桃忌は小説家太宰治の忌日。退廃的な作風で知られるが、軽妙でおかしみのある作品も残している。

さて、私たちは言わなくてもよいことを言つて人を傷つける。一方で、優しい言葉をかけられて救われることもある。言葉は使い方一つである、かよこさんはしみじみ感じられたのだろう。太宰治を再読したくなった。

女偏の漢字を探す梅雨ごもり 井上あき子

どんな字を探されたのだろうかと、私も辞書を開いてみ
た。娥、娟、娉、嫵、娠、娜、艶やかで幸せそうな字が並ぶ。
雨の一日をあき子さんは辞書とともに過ごされた。俳人
ならではの梅雨ごもりだ。

佇める携帯電話合歓の花

西田 敏之

合歓の花は、刷毛のような形でほのかに紅く美しい。旅行中、集団から少し離れた合歓の木の下で携帯電話をかける人がいる。旅の無事を告げていらっしやるのか、残してきた家人を心配されているのか。吉報を受けとったのかもわからない。

潮吹くを指で確め浅蜷買う

大西ユリ子

浅蜷はいかにも庶民の味で、なつかしい日常の味わいがある。最近のスーパーマーケットではパック売りしており、ユリ子さんのように指で触れることは出来ない。まだ、秤売りしてくれる店があるとはうらやましい。町裏の生活のにおいが出ている一句だ。

振花の振れ具合を言ひ合へり

金子 清孝

花の穂のねじれが奇妙で、そこに関心がそそがれる。花の形も色も愛らしい。「これは見事なねじれだ、芸術的だな」という会話が聞こえてくるようだ。奥さまとの散歩の途中

か、仲間との吟行の最中のことか。いずれにしても楽しさが伝わってくる。

夏館少女のような霊媒師

磯田せい子

霊媒師は心霊や死者の霊と意思を通じうる媒介者。青森県の恐山、岐阜県の御岳の霊媒師が知られている。

私は高校生の頃、御岳登山の道々に繰り広げられる霊媒術を目の当たりにしたことがある。白装束に全身を包んだ一心不乱の術は今も鮮明に脳裏に焼きついている。

せい子さんは夏館で、霊媒師に出会われた。その方が少女のようであったところにミスマッチな印象を受けたのだろう。

ビタミン菜てふ初物で暑気拂ひ

小松美保子

今年はずっと酷暑の夏だった。テレビや新聞で連日のように暑さ対策が紹介された。

ビタミン菜は、小松菜に似た濃緑野菜である。美保子さんは、このビタミンとミネラルたっぷりの野菜を食べて夏を乗り切っておられるのだろう。